



敷地内の工房。木の香りのなかで家具作りする薫彦さん。1階のスペースは、さまざまな用途に使われる。



青木町七丁目3-48
☎95-5619
水・木定休

自由につながりながら、
豊かな人生を共有する
暮らしかた

ギャラリー彦六

田島薫彦さん
久子さん



「人付き合いは変わったね。
広がって、刺激がある。」
「どんどんつながるって感じね。」

ギャラリー彦六は、移りゆくたかはまの姿を撮りとどめた先代・田島彦彦さんの写真を中心に、木製家具やさまざまなジャンルの展示が行われるギャラリー。訪れると、天井の高い落ち着いた空間で、ゆったりとした時間の流れに包まれる。

オーナーの田島薫彦さんは50歳で自動車関連メーカーを早期退職してギャラリーを開いた。

かなり思い切った決断だったのでは？と尋ねると「海外出張で出会った方たちの影響が大きいかな。プライベートを大切に楽しむ姿がいいなと思っていました。」と語る。

「会社で、『定年後の過ごし方を考えよう』みたいな話を聞く機会があったんですよ。仕事上の付き合いだけだと定年後つらいよ、地元でも友だちを作りなさいよ、というような教育だったと思います。自分の『老後』を考えた最初だったかもしれないですね。ちょうど父が体調を悪くし、写真店という職業柄、ギャラリーをやってほしいという声もあった。自分の趣味の木工もあわせて『ものづくり』に関わることをしてみようかなと人が集まって、つながりができる場をつくりたいなと思ったんですよ。やっぱり、同年の友人たちの存在も大きかったですよ。」

久子さんは「夫が定年退職したらどうやってすごしていくんだろ」と漠然と不安でした。でも、早期退職したいと相談されたときは、何となく、あと5年やったら？と答えたんです。そしたら、その5年って男にとってはすごく大きなんだよと言われて。そうなんだあ、じゃあ、いいよって（笑）。」「よくOKしたよね（笑）。確かに5年後だったら、状況は違っていたかもしれない。」

例えば、今、当時の田島さんの年代の方に何か伝えるとしたら？

「女性はもともと社交性があるけど、男性が60歳すぎてから急に地域に入るのには勇気がいるよね。周りにもそういう人がいて、それで、町内会役員を思い切ってやってみてよかったとか言っている。もちろん、会社での体験もいかせているはずだし。なにより、人って、身近に、話をしたり、ちょっと飲みに行ったりする相手がいないと、よくないことになっていく気がするんですよ。私は、父の撮った昭和の写真を見せ、それをもとに人の話を聞く、話す、それを続けていくうちに、まさに詳しくなったし、たかはまに愛着をすごくもつようになった。」

久子さんも「今となっては、こうなるように、道ができていたのかもしれないって気がします。夫の決断に感謝もしていますよ。以前なら想像もしなかったいろいろな分野の方々と知りあえて、つながれた。出会いのおかげで今まできました。『おかげさま』に尽きるわ。」

取材の最後に薫彦さんがひとこと。「今の年齢だから思うことかもしれない。でも、こういうことをもつと若い人が思ってくれば、きつとまちはよくなるよ。」